「信仰による救い（盲人の信仰と救い）」

ルカ 18:35-43

2020.6.28 南与力町教会

序：この物語の重要性

今日の箇所にはイエス様が盲人をいやされたこと、見えるようにされたことが記されています。イエス様が盲人をいやされたこと自体は要約のような形でこれまでにも語られてきました。ルカ福音書 7 章 21 節には「そのとき、イエスは病気や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の盲人を見えるようにしておられた」と記されています。このようにイエス様が大勢の盲人をいやされた、見えるようにされたということは語られていました。しかし、今日の箇所のように具体的に盲人のいやしが物語として語られているのは、ルカ福音書においてここが初めてであり、また唯一の箇所です。そのことを考えると今日の箇所はただ一人の盲人がいやされたということだけではなく、私たちにとって重要な意味が含まれているのだと思います。だからこそ、この物語は教会の中で大切に語り継がれ、やがて福音書の中に記されることになったのです。

①「目が開かれる」ことの意味

・「心の目」が開かれる

今日の箇所で盲人はイエス様によって目が開かれ、その後イエス様に従っていくのですが、この「目が開かれる」ということには象徴的な意味があるのだと思います。今日の箇所の直前にはイエス様が弟子たちにご自分の受難と復活を予告されたが、弟子たちは全く理解できなったことが記されています。34 節には「彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである」とはあります。弟子たちはすでにイエス様を信じ、イエス様に従ってきたわけですが、そういう弟子たちでさえイエス様の受難と復活ということに関してはまだ目が開かれていなかったということでしょう。心の目が閉じてしまっていた。だからその言葉の意味が彼らには隠されていたのです。そしてそのような弟子たちは、イエス様がいざ捕らえられた時、イエス様に従い抜くことができなったのです。

そう考えると、その直後にある今日の箇所で盲人の目が開かれるということには、心の目が開かれるという象徴的な意味があることがわかってくるのだと思います。私たちは心の目が開かれて初めて、イエス様のことが分かり、イエス様に従っていくことができるのです。

・「見えるようになる」＝「救い」

またイエス様は 42 節で盲人に次のようにおっしゃっています。

「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った。」

すなわち、この盲人にとっては「見えるようになること、目が開かれること」は「救い」そのものであった、ということです。それは全くの暗闇の世界から光の中に移されること、そのようにして救われることです（イザヤ 42:7 節参照）。

この「救い」ということは、これまでの流れの中でテーマになってきたことです。イエス様は 18 章 24 節で、金持ちの議員が非常に悲しむのを見て、次のようにおっしゃいました。

「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針

の穴を通る方がまだ易しい。」

　それを聞いた人々が驚いて、「それでは、だれが救われるのだろうか」と尋ねますと、イエス様は、「人間にはできないことも、神にはできる」と言われました。人が救われるということは、人間にはできないが、神にはできる。神には救うことがお出来になる、と言われたのです。では人はいかにして神によって救われるのでしょうか。今日の箇所はその問いに対して明確な答えを出しています。具体的には 42 節でイエス様が盲人に「あなたの信仰があなたを救った」と言われた言葉です。救われるために必要なのは「あなたの信仰」なのです。「行い」ではありません。金持ちの議員はイエス様に対して「善い先生、何をすれば（何を行えば）永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と尋ねました。しかしそういう自分の「行い」によっては永遠の命を受け継ぐことはできない、救われることはできないのです。イエス様がこの盲人に「あなたの信仰があなたを救った」と言われたように、「信仰」こそ、救われるために必要不可欠なのです。では人がそれによって救われる「信仰」とはどういうものなのでしょうか。イエス様が「あなたの信仰」と言われた、この盲人の信仰とはどういうものだったのでしょうか。そこに私たちが救われるために必要な大切なヒントがあるはずです。

②盲人の信仰と主イエスによる救い

　主イエスがエリコという町に近づかれたとき、この盲人は道端に座って物乞いをしていました。彼は生まれつき目が見えなかったのでしょうか、それとも元々は見えていたのに見えなくなってしまったのでしょうか。彼は 41 節でイエス様に「主よ、目が見えるようになりたいとのです」と言っていますが、元の言葉では「再び見えるようになる、視力を回復する」という言葉が使われています。そえゆえおそらく彼は元々目が見えていたのにある時から見えなくなってしまったのだと思います。目が見えていたころはできていた仕事もできなくなってしまいました。さらに彼には面倒を見てくれる家族や親せきもいなかったのでしょう。彼はただ人々が行き来する道端に座って物乞いをするしか生きる術がなかったのです。

　そんな彼の耳に群衆が通っていく音が聞こえてきました。彼は通っていく人々に「これは、いったい何事ですか」と尋ねました。こんなに大勢の人が通っていくというのはただ事ではない、と目が見えない彼は察したのです。

　人々は彼に「ナザレのイエスのお通りだ」と伝えました。それを聞いた瞬間、彼は大声で叫びました。

「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」

　行列の先を行く人々は彼を叱りつけて黙らせようとしました。これからエルサレムに赴こうとしているイエス様をこんな物乞いのことで煩わせてはならない、邪魔させてはならないと思ったのかもしれません。しかし彼は叱られても黙るどころか、ますます大きな声で叫び続けました。

「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」

　この盲人は「ナザレのイエス」のうわさ、評判を聞いていたことでしょう。ナザレ出身のイエスが多くの病人をいやす奇跡を行っていること、また盲人の目を見えるようにしているということも聞いていたかもしれません。その「ナザレのイエス」が今自分の目の前を通り過ぎようとしているのです。彼からすれば千載一遇のチャンスです。このチャンスを逃してなるものか、と彼は必死だったと思います。

大勢の群衆のざわめきの中で、彼にできることは大声で叫ぶことだけでした。そして何とかイエス様に気づいてもらおうとしたのです。
「ダビデの子イエス様、わたしを憐れんでください」。
　彼はイエス様のことを「ダビデの子」と呼んでいます。当時ユダヤ人たちは「メシアはダビデの子である」と言っていました（ルカ 20:41）。神様がダビデの子孫からダビデの王座を継ぐ者、神が油注がれた王、メシアを起こすと約束なさっていたからです。それゆえ「ダビデの子」とはメシアの称号となっていました。この盲人はイエス様のことを「ダビデの子、メシア、神様が油注がれた王」であると信じていたのです。、福音書においてイエス様のことを「ダビデの子」と呼びかけるとはこの盲人が初めてです。そういうイエス様への信仰が彼にはありました。そして彼はイエス様に「わたしを憐れんでください」と憐れみを請いました。人々から黙るように叱られても、かまうことなく、ますます大声で叫び続けたのです。
「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」
　その必死の叫び声はイエス様の耳に届きました。そしてイエス様は歩みを止め、盲人を自分のそばに連れてくるようお命じになりました。彼が近づいてくるとイエス様は尋ねました。
「何をしてほしいのか」
　イエス様は当然聞かなくとも、彼の望みをわかっておられたと思います。しかしあえて「何をしてほしいのか」と尋ねることによって、彼自身の口からそれを聞こうとされたのです。彼は答えました。
「主よ、目が見えるようになりたいのです」
　彼は道端で物乞いをしていたのですが、彼がイエス様に求めたものは「物」ではありませんでした。食べ物やお金をくださいとは言いませんでした。そうではなく、「主よ、もう一度目が見えるようになりたいのです」と自分が抱えている根本的な問題の解決、すなわち救いをイエス様に求めました。
　イエス様は彼に言われます。
「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った。」
　すると、盲人はたちまち見えるようになり、神をほめたたえながら、イエスに従っていきました。それを見ていた民衆も皆、神に賛美をささげました。神がイエス・キリストを通してこのすばらしい御業をなされたことを見て取ったからです。

　盲人の信仰。それはイエス様に対し「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と叫び求め続ける信仰でした。人々から「うるさい、黙れ」と言われようが、彼はかまうことなく、「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」と執拗に、粘り強く叫び続けたのです。そこに彼の信仰が表れています（ルカ 18:7-8 参照）。また彼はイエス様から「何をしてほしいのか」と尋ねられた時、「主よ、目が見えるようになりたいのです」と頼みました。彼は物やお金などのその場しのぎの助けではなく、「目が再び見えるようになる」という彼にとっての根本的な問題の解決、すなわち根本的な救いをイエス様に求めたのです。そこにも彼のイエス様に対する信仰が表れています。彼の信仰は、イエス様に憐れみを請い続ける信仰であり、イエス様なら自分の目を見えるようにしてくださる、この暗闇の中に捕らわれた自分を救ってくださる、光の中へと解き放ってくださる、そのように信じ、求める信仰です。それに対してイエス様は「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った。」と宣言されたのです。そして実際彼は見えるようになり、神さまをほめたたえながら、イエス様に従っていきました。イエス様に従う

弟子の仲間になったのです。それはすべてイエス様を通して神様がなされた御業でした。ですから、これを見たすべての民は神に賛美をささげたのです。

人はいかにして救われるのか。その問いへの明確な答えがこの物語の中にはあります。この盲人は、あの金持ちの議員のように「善い先生、何をすれば（行えば）永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」とは尋ねませんでした。彼はただただ必死に「ダビデの子よ、主よ、わたしを憐れんでください」と叫び続けました。そして「主よ、目が見えるようになりたいのです」と自分の根本的な救いをイエス様に求めたのです。その信仰がイエス様によって認められ、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った」という宣言を受け、彼は救われたのです。

私たちもこの盲人のような信仰に生き続けたいと思います。わたしたちは体の目は見えているかもしれません。しかし、問題は「心の目」です。「心の目」が開かれていなければ、十字架上で死に、復活されたイエス様を見ることはできません。もしそのイエス様のことがわかり、イエス様を信じ従うことができているとすれば、それは主が私たちの目を開いてくださったからなのです。先ほどお読みいただいたイザヤ書 42 章は「主の僕の詩」の一つ目のものです。その 6 節 7 節にはこのようにあります。
「主であるわたしは、恵みをもってあなたを呼び／あなたの手を取った。民の契約、諸国の光として／あなたを形づくり、あなたを立てた。見ることのできない目を開き／捕らわれ人をその枷から／闇に住む人をその牢獄から救い出すために。」

イエス様はまさに「諸国の光」として神様によって立てられたお方です。その目的は「見ることのできない目を開き／捕らわれ人をその枷から／闇に住む人をその牢獄から救い出すため」でした。
私たちの目も実は「見ることのできない目」であり、暗闇の中に住み、サタンの支配に捕らわれていました（使徒 26:18 参照）。しかしそういうわたしたちの目を開き、暗闇から光へと、サタンの支配から神のご支配へと救い出すため、解放するために、イエス・キリストは来てくださったのです。神はこのキリストを通してわたしたちを救い出してくださるのです。
そしてこの救いにあずかるために私たちに求められるものはただ「信仰」です。あの盲人のような信仰です。すなわち、イエス様を「ダビデの子、メシア、救い主」と信じ、そのイエス様に「わたしを憐れんでください」と請い求め続け信仰、そして「主よ、目が見えるようになりたいのです。主よ、お救い下さい」と率直にイエス様に救いを求める信仰です。そのような信仰をもってイエス様に寄り頼むのなら、イエス様は私たちにも言ってくださるのです。
「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った」と。
そうして私たちは開かれた目でイエス様を見つめ、イエス様に従っていくことができるのです。それは嫌々することではありません。目の開かれた盲人は神をほめたたえながら、喜んでイエスに従っていきました。私たちもまた救われた者として、その救いをキリストを通して与えてくださった神様をほめたたえ、礼拝しながら、喜んでイエス様に従っていくのです。それがわたしたちの歩むべき信仰の道です。お祈りを致します。